

学校までの通り道にあった広い空き地でいつの間にか建設工事が始まっていた。

友達とくだらない話をしながら帰ってる途中入ってきた光景になんとか足を止める。

数十メートル離れた視界の先では作業着を着た男性達がそれぞれ忙しく働いていた。

ふとその中の一人の男性に目が行く。

とても重そうな……俺では持ち上げる事も無理そうな長い鉄の板を軽々と担いで歩く若い男性。

建設現場でよく見る作業着ではなく長袖 T シャツを着て、男性のそのはち切れんばかりに盛り上がった筋肉で生地がぱつんぱつんになっていた。

「……………」

そのすごい筋肉に目が奪われた。

「おーい、裕人〈ヒロト〉。何してんだよ、早く帰ろうぜ」

「あっ……うん、ごめん」

友達の声にハッと我に返り慌てて男性から目を逸らす。

「何見てたんだ？」

「あ、えと……工事の人達、熱いのに大変だなんて……」

「あ～、ホントだよな。俺絶対ムリだわ。こんな熱い中仕事してたらマジ死んじゃう」

「ハハ……俺も……」

笑いながらも心臓はいつもよりドキドキ激しく鼓動していた。

自分でも何でこんなドキドキしてるのか分からない。

(あの人……すごい筋肉だったなあ……周りの人よりも腕とか、胸とか背中とか、すごいムキムキだった……)

そんな事を考えながら家に帰り、その後ご飯を食べても、シャワーを浴びてても、ベッドに入って眠ろうとしても、ずっとあの身体が頭から離れなかった。

(あ……あの人、今日もいる……)

次の日の帰り道、友達は部活だったので今日は一人で建設現場の前を通り過ぎる。――いや、通り過ぎようとしたけど自然と足が止まってしまった。

遠目から見ても目立つ全身を覆う分厚い筋肉に、昨日目に留まった人だと見た瞬間にわかった。

相変わらず重そうな荷物を軽々と運んでる姿に見惚れる。

あの子の姿を目にした途端昨日のように心臓がドキドキと高鳴った。

(すごい筋肉だなあ……どうやったらあんな筋肉つくんだろ……カッコいいなあ……)

ヘルメットを被ってるし横顔で距離もあるからその顔はよく見えないけど、顔面の美醜なんかあの肉体の前ではどうでもいい事だと勝手に一人で納得していた。

――と、その時

「おい守谷！これも向こうに運んでくれ！」

「はい監督！」

年配の人の叫ぶ声が聞こえたと思ったら、俺がずっと見てたその人が威勢よく応えている姿があった。

その為意図せず彼の名前が『モリヤ』だと知る。

（守谷さんって言うんだ……今の声もなんかカッコよかったなあ……）

低くて張りのある男らしい声だった。

身体だけじゃなく声まで男らしくてカッコいい。

（顔……どんな顔してるんだろ……）

さっきは美醜なんかどうでもいいって思ったけど……いや、ホントに、万が一守谷さんの顔が醜かろうとも、彼のかっこよさは少しも損なわれはしないのだけれど、でも、どんな顔をしてるのかはちょっと気になった。

（こっち向いてくれないかな……あ、でもそしたら俺に見られてたって気付くか……男子校生にジッと見られてるなんて気味悪いよな……）

――そう思った時だった。

クルリと、本当に守谷さんがこっちの方を見てきた――気がした。慌てて顔を逸らしたので実際はどうか分からない。

（バ、バレた……かな……？ いや、だ、大丈夫だよな？

……きよ、今日はもう帰ろ……)

当然この建設現場には守谷さん以外にもたくさんの方がいるので、こんな所で一人ですっと立ってたら誰かが不審に思うかもしれないとそそくさその場を後にした。

昨日と同じように頭の中はずっと守谷さんの逞しい肉体の事でいっぱい、ベッドに入り目を瞑っても、瞼の裏に焼き付いたままだった。

「っ……」

重い荷物を担ぐ時の守谷さんの腕や脇腹、胸や背中を思い出すと何故かお腹の奥がムズムズしてしまい、ぎゅっとお腹を押さえながらその日は無理矢理眠りについた。

(あ……今日は……いないのか……)

今日も一人で建設現場の前を通りがかり、足を止めた。目に映る範囲にあのすごい筋肉はどこにも見当たらない。

今日は休みなのか、それとももっと奥の方で作業してるのか、この建設現場と何の関わりもない俺にそれを知る手立てはなかった。

(まさか辞めた……とかはないよね……仕事、全然辛そうじゃなかったし……あ、もしかして別の現場に行っちゃったとかあるのかな……もうここには来なかった

り……)

嫌な想像ばかりが浮かんでどんどん下を向く。

(って言うか俺……なんでこんな落ち込んでんだろ……
全然知らない人なのに……別に会えなくなったからって
そんな……)

「オイコラ守谷ァ！ お前なんてカッコで外出てんだ。
警察に見つかったら捕まんぞ」

昨日も聞こえた『監督』のその言葉にパッと顔を上げた。
顔を上げた目線の先には探してた守谷さんの姿が――

「いや何でっすか。ちゃんとズボン穿いてるでしょ」

「アホか、んなムチムチのドスケベボディ堂々と表に出
してんじゃねえよ。通行人のお嬢さんがひっくり返るだ
ろうが」

「いやいやいやいや、なんすかそれ……てかお嬢さんな
んで一人も……」

――いた。

守谷さんだ。

どうしてかヘルメットを被ってない素顔の彼がそこに
いた。

しかも

上半身が

裸で

(……………あ、え？　っ……な、なんで裸？？　あ、う……す、すご……筋肉が、剥き出しで……胸……あんな盛り上がって……お腹……たくさん割れてる……1.2.3.4……8……！　8　パックだ……すごい……あ……よく見たら汗がいっぱい流れて……っ……な、なんかすごく……………って、あれ？　守谷さんの身体、なんかメチャクチャ近いような……)

「オイ」

「あ……」

間近に迫った筋肉から目を離して顔を上げると、そこには守谷さんの顔があり俺をジッと見下ろしていた。

ヘルメットを着けてない守谷さんの顔が、間近から俺を見下ろしている。

男らしくて、精悍で、野性的で、すごくカッコいい。

もしかしたら顔はすごくアレなんじゃないかって思ったけど、そんな事なかった。すごくカッコいい。野生の虎みたいだ。

背も 170 センチ程度の俺よりかなり大きい。

分厚く覆われた筋肉と相まって、まるで目の前に巨大な壁が聳え立ってるみたいだった。

(大きい……カッコいい……汗、いっぱい……カッコいい……)

守谷さんの顔から、首筋、腕、胸、腹、逞しい肉体の至る所から汗が流れ出ていた。

顎から滴り落ちる汗を手で拭う男らしい仕草に、俺の二倍以上ありそうな太い腕に心臓がドキドキしっぱなしだった。

身体が熱い。

傍に立っていると彼の屈強な身体からムワッと熱気があふれてるように感じて身体がジワジワ熱くなった。

「オイ、聞こえてるか？」

「え……？ あっ」

状況も忘れて守谷さんの顔と身体に見惚れてた俺を、その当人が眉を顰めて見下ろしていた。

慌てて何か返事をしようとするけど焦って声が出ない。けど俺が何か言う前に守谷さんは、その野性味あふれた顔でニヤリと笑いかけてきた。

「お前、俺の事見てただろ？」

「え……？」

言葉が脳に届くよりも先に彼の表情に心臓が飛び跳ねた。

守谷さんが俺に合わせて腰を屈める。

男らしい、きっと女性にとってもモテるのだろうセクシーな彼の顔が、俺のすぐ目の前にあった。

息がかかる程の至近距離で、野生の虎のような鋭い眼差しに囚われる。

「あ……」

金縛りにあったように固まった俺に彼が続けて問いかけた。

「昨日も一昨日も、俺のカラダ、じっと見てたよな？」

「っ……あ……う……」

頭の中は真っ白だった。

見てた事がバレたっていう驚きと、でもそれより何より――

（ち、近い……）

守谷さんのドアップに頭の中が混乱した。

何か言わなきゃって思うのにさっきからずっと唸り声のようなものしか出てこない。

（あ、汗が……）

距離が近すぎてその雄臭い熱気が、汗の匂いが、こちらにまで漂ってくる。

彼の汗の匂いを嗅いだ途端、心臓がバクバクうるさく鳴り響いた。

「……ふうん、ガキにしちゃ結構イイ顔するな」

「ふえ……？」

どうしてか涙が滲んできた。

身体中がくずくずに熱くなり、お腹の奥がムズムズして、手足もじんじん痺れてきた。

(なんだろう……身体がおかしい……)

「お前、高校生？」

「あ……え……あ……はい……」

(そうだ……昨日の夜もこんな風に身体が熱くて……お腹がムズムズして……でも昨日よりずっと熱くてムズムズする……)

「……………」

……………まあいっか」

「??」

守谷さんはしばらく何か考えてみたいだったけど、自己解決したらしくそう言って俺を見てきた。

俺は守谷さんの視線に更に身体を熱くしてフウフウ息を乱しながら彼を見返す。

「タイミングよかったな。今日は早上がりの日なんだよ。着替えて車とってくるから5分だけ待ってろ」

「え……？」

唐突に言われた言葉に頭がついていかない。

それなのに守谷さんはそう言い残すとさっさと背を向けて行ってしまった。

どうしてと、理由を聞く暇もなく残された俺は……守谷さんの言いつけ通りに一人ぼうっとその場で待っていた。

「ほんとに待ってたのか」

そして守谷さんは本当に5分程で車に乗って戻ってきて、自分で待ってろと言ったくせに俺を見つけるとニヤニヤ笑ってそう言った。

「え……あ……」

「いいぜ、乗れよ」

訳が分からず戸惑う俺をまたも置いて守谷さんはさっさと助手席のドアを開け、俺は訳が分からないまま何も考えずそれに乗り込んだ。

殆ど何も知らない人の車に乗っているというのに、危機感は何も湧いてこなかった。

普段ならこんな事絶対にしないのに、この時の俺は熱に冒されて頭が働いてなかった。

その上車内は守谷さんの匂いでいっぱい、完全にその事ばかりに気を取られてた。

「……あ、あの……どこへ……？」

充満する匂いに身体がムズムズする。

頭がぼうっとして、今隣に守谷さんがいるという現実思考が追いつかなかった。

そんな中で質問を口にすると、意外とすぐに答えが返ってきた。

「ん？ 俺ん家」

「……………え？」

やっぱりこれは夢なのかもしれないと、守谷さんの精悍な横顔を見ながらぼんやりとそう思った。

「え？ え？ え？ え？ え？ え？」

守谷さんの住むアパートに訳が分からないまま連れ込まれ、訳が分からないままベッドに押し倒され、訳が分からないまま服を脱がされそうになっていた。

「あ、あの……守谷さん……？」

「ん？ 何で俺の名前……ああそうか、お前俺のストーカーだったな。いつの間に調べたんだ？」

「あ……う……ちが……よ、呼ばれてるの聞いて……」

ストーカーと、確かに自分のしてる事はソレに近いと気付いて、だけど狼狽えつつも調べた訳ではないとそれだけは否定する。

「冗談だよ。お前の名前は？」

「あう……さ、桜井……裕人……です……あっ、わっ……」

「裕人な。俺の事は龍二って呼べ」

「あっ、りゅ、龍二さん……あっ……っ龍二……さん……
っ、な、なんで、俺の服……脱がすんですか……？」
制服のシャツを脱がされ、ズボンもたった今脱がされて
しまった。

どんどん服を剥ぎ取っていく龍二さんに碌な抵抗もでき
ずに問いかける。

「あ？ 服着たまんまやるのが好みか？」

「や……やる……？ やるって……何をですか……？」

「は？ セックスに決まってるだろ」

「セツツツツ！！??」

(は？ え？ 何で？ え？ 何で急に……い、いつの
間に、龍二さんとセックスする事が決まったの??)

ビックリしすぎて固まる俺に龍二さんも首を傾げた。

「何驚いてんだ？ お前が誘ってきたんだろ？」

「さそツツ！？ お、俺が……？」

「違うのか？」

「え……ち、ちが……あ……あ、う……うう……」

(……誘った？ 俺が？ 龍二さんを？ そんな……
だって俺、男の人が好きなワケじゃ……セックスだっ
て、1回もした事ないのに……)

ああでも俺、龍二さんの身体を見てすごくドキドキした。

ドキドキして、もっと近くで見たいって思った。
近くに行って、その身体に触りたいって、そう思ったー
(お、俺……無意識に龍二さんのこと……)
ぶわわわわっと、顔が沸騰したみたいに熱くなった。

「……その気がないならやめとくか。俺、無理矢理は趣味じゃねえし」

「あ……う……」

「どうする？」

龍二さんに見下ろされてる。
俺の体重の倍程もありそうな大きな身体に覆い被さられてる。

すごく距離が近い。

シャワーも浴びずにベッドに連れ込まれたから汗の匂いが漂ってくる。

太い首、分厚い胸板、逞しい腕、すごくドキドキする。
お腹がキュウキュウって疼いた。

「っし、……したい……です……龍二さんと……セックス……っ、お、俺と……セックス、してください……っ」

「……裕人、口開けろ」

「え？ は、はい……ふぐんぐんッ！！??」
龍二さんに言われて素直に口を開けたら彼の大きな口に

塞がれてしまった。

驚いてるとにゆるっと舌が入り込んできて、俺の口の中を好き勝手に舐め回し始める。

「ふうッ、っ、はっ、はひゅ……ッ、んんっ、ふっ……んんんんッ♡」

キスだ……俺、龍二さんとキスしてる……けど初めてのキスにときめいてるような余裕はなかった。

龍二さんの舌は口の中をくちゆくちゅ掻き回して、先っぽで上顎をざらざら撫でて、くすぐったいって思ってたらジュルルッ♡て口内全体を思いっきり吸い上げられた。

こっちはキスをするのも初めてだというのに、戸惑ってる隙も与えてはくれずただただ翻弄される。

「んううっ、んっ……んう、ん、んんっ……はふっ、はっ……んッ、んうううう～～っ♡」

引っ込んでいた俺の舌が捉えられて、強引に舌同士が絡め合わされる。

にゆるにゆる蠢く舌に合わせてクチュクチュ水音が部屋に響き渡る。

いやらしい音が脳髄にまで響いてきて、キスってこんなにエッチなものなんだと、龍二さんの舌の動きに必死で合わせながら目に涙が滲んだ。

「ふぐ……う、んんんん……っ♡」

キスしながら口の中にあふれてきた唾液をゴクゴク飲み込む。

ああこれ……龍二さんの唾液を飲んでるんだと、そう気付いた瞬間にお腹がぐずぐずに溶けそうなくらい熱くなった。

「あへえ`……♡」

初めてなのに容赦のない濃厚なキスを受け、頭が馬鹿になったみたいにクラクラした。

「気持ちよかったか？」

「あう……♡」

それでも龍二さんからの質問に、俺の首はコクリと反射的に頷いていた。

「ハハハ、そうかそうか。けどまだまだだぞ、これからもっとヨクしてやるからな」

「……はひい……♡」

こっちは初心者なので少しは手加減してもらえないだろうか……けど頭はクラクラしてるし口の中は痺れてるしでそう訴える事ができない。

俺がぐったりしてる間にも龍二さんの手は淀みなく動いて、俺の残ってた下着やら何やらを全て脱がしてしまった。

「あううっ♡」

チュッ♡ と可愛らしい音を立てて俺の乳首がキスされた。

音に反してビリリッ♡て強い刺激が走り思わず声が出る。